

# 地球科学データベースの一般公開と利用状況

成果普及部門 地質調査情報部 金沢 康夫

## 知的基盤整備

地質調査総合センターでは、地球科学に関する情報を「知的基盤」、すなわち広く供用可能な体系化された情報として社会に提供するため、重要課題に関する情報を整備し、地球科学図やデータベースとして一般公開している。整備すべき課題は、①地質・都市地質・海洋・資源・地球物理・地球化学など国土の基本情報、②地震・火山など社会的・行政的ニーズに対応した情報、③アジア地域等の国際協力により整備するデジタル地質図と関連データベース、④統合型情報および情報検索システム、でありこの4つの観点から検討している。

## RIO-DB における利用状況

現在、約40の課題についてデータベース(デジタル地質図を含む)整備計画を立て、まとめたものは産総研・研究情報公開データベース(RIO-DB、<http://www.aist.go.jp/RIODB/riohomej.html>)への登録・インターネット公開、あるいはCD-ROM出版を行っている。特にインターネット公開は普及の最も効果的手段であり、これを積極的に進めている。地質関連DBはよく利用されており、2002年の利用者統計

ではRIO-DBのアクセス数の上位10位以内に地質関連DBが5個占めている(図1)。この他に、外国地質図DB、物理探査調査研究活動DBなど約10個のデータベースが公開あるいは公開を予定しており、その中で「地震に関連する地下水観測DB」は今後多くのアクセスが見込まれている。

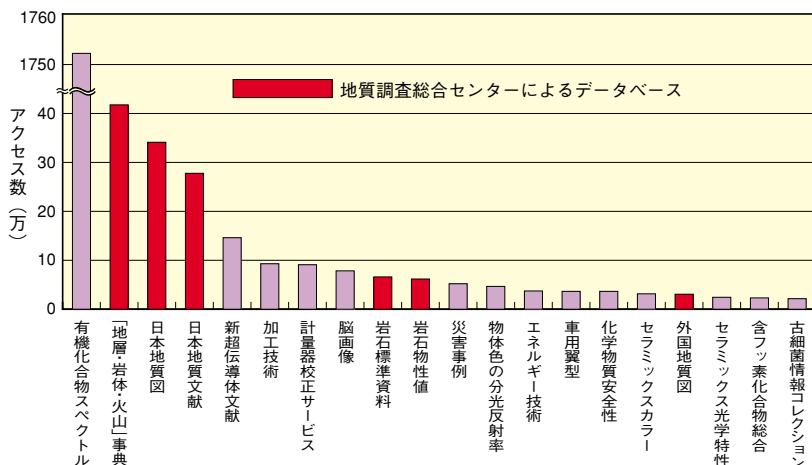
それぞれのデータベースの利用者は必ずしもその分野の専門家とは限らず、行政・企業・教育・社会一般で広く基礎知識を必要としている人々もおり、利用者層に応じた内容の充実を図ることが重要である。そこで利用者層を把握するためのログ解析(リクエスト元サーバーのアドレスの分類など)を定期的に行っているため、その一部を紹介する。図2はRIO-DBアクセス数の上位2~4位のDBについて、ログ解析から得られた利用者層の分布である。それぞれの利用者層がかなり異なっていることが分かる。「地層・岩体・火山」事典の場合、特に「火山」に対する国民の高い関心が見られた。社会一般の関心が高いことから、このような利用者層の分布は「一般型」と呼べるであろう。同様に、日本地質図データベースは約58%が海外からのアクセスであり、「グ

ローバル型」と言える。日本地質文献データベースは大学および産総研からのアクセスが多く「学術型」の分布を示した。

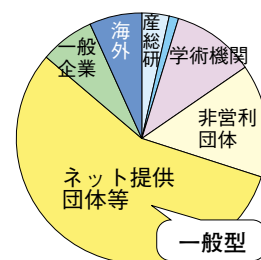
## 今後の対応

RIO-DBを広く日本の国民や外国で利用してもらうために、対象とする利用者層への対応のみならず、アニメなども含めた平易な説明と英語版を充実することが普及に結びつくと考える。

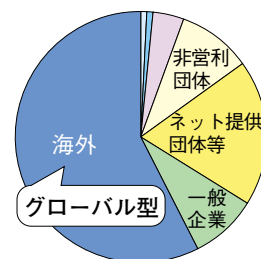
地質調査総合センターでは、ログ解析のほかに出版物の販売状況、アンケート調査、地質相談などを通して、成果物への関心度と利用者層・ニーズの総合的把握に努めており、これらを基にDBの改良や統合、新たなDBの編集を進めていく。



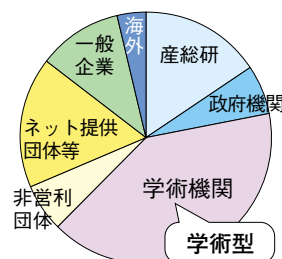
● 図1 産総研 RIO-DB アクセス数(上位20位まで、2002年)



「地層・岩体・火山」事典



日本地質図データベース



日本地質文献データベース

● 図2 地質データベースの利用者層分類(2002年)